



はじめに

森林保険では、気象害が発生したとき、契約情報を確認した上で、被害現場で被害調査を行うこととなります。被害調査を行って、林の状況と被害の状態を調べ、報告様式にそれを記述します。また、被害の状態を写真に記録する場合もあります。ときには、発生した被害が何の気象害なのか判別できない場合もあります。このような一連の被害調査の各場面ですべて使える森林被害調査システムを開発しています。目指しているのは、タブレット一つを持って被害現場へ駆けつけ、そのまま被害調査と報告ができてしまうシステムです。このシステムは、市販のタブレット端末（iOS）に無料のデータベースアプリ（FileMaker Go）をインストールすれば動作します。

機能①

契約情報閲覧・検索機能

森林保険契約情報を検索し、閲覧することができます。契約情報と呼び出すことにより、契約内容や契約条件の確認ができます。さらに、損害調査における各報告様式

に反映可能な項目は自動的に反映させることができ、入力の手間を省くことができます。

機能②

損害調査支援機能

被害調査を行うとき、まずは場所を特定し、記録しなければいけません。そのとき、タブレット端末に内蔵されているGPS機能が役立ちます。損害調査支援機能のトップページは位置情報入力画面となっており、ボタンを押すだけでその場所の緯度経度が記録されます。被害の状況を調べ各報告様式に調査した内容を記入していきます。このときも、タブレット上の調査情報入力



契約情報検索・閲覧



写真撮影・管理



GPS機能による位置情報取得

機能③

種別判定機能

被害を受けた森林の傾斜、斜面方位、標高などの地形条件、樹種、林齢、樹高、胸高直径などの林木の状況、被害の形態などの様々な情報を選択式で入力すると、被害種別判定が可能な機能が組み込まれています。これは過去に気象害が発生したときの様々な状況を訓練データとして機械学習させ、被害種別を判定しています。この機能をどんどん使って学習させていけば、さらに判定精度が高まると考えられます。

今後も開発を進め、本システムの実用化と森林保険業務への活用を目指します。

画面に入力していきます。また、被害状況の記録として写真撮影することもあります。その場合は写真撮影および管理画面に切り替えることで、撮影が可能となり、同時に撮影時間や撮影場所のGPS情報も記録されます。



被害種別判定



被害状況の選択入力